

## 第2回図書館本館再整備基本設計ワークショップ 「事例紹介～先進図書館では?～」要点録

講師：常世田 良氏（立命館大学文学部教授・図書館本館再整備基本計画検討委員会委員長）

### ◆ はじめに

なぜ京都の人間が多摩市に関わっているのかということ、私は東京生まれ東京育ちであり、千葉県  
浦安市で図書館の仕事に携わり、最後は図書館長をしていた。当時日本の図書館の先進的地域がこの  
多摩地域と大阪のベッドタウンで、この2つの地域が日本の図書館を牽引してきた。多摩地域の図書  
館の職員には大変お世話になったため、多摩市の図書館に恩返しをということで、お手伝いさせても  
らっている。

多摩市立図書館本館再整備は、基本設計・実施設計の段階に入ったとのことであるが、一般的な図  
書館サービスで言えば、多摩市の図書館サービスは、全国の中でもトップレベルである。教養レベル  
の本を借りるのであれば、十分であるといえる。

新しいまちづくり・地域づくりにおいて、先進的で、豊かで安全で成熟した地域の拠点として図書  
館を考えていきたい。一般的な公共施設は、その施設の中に入らないとサービスを受けられないが、  
図書館は不思議な施設であり、図書館は本を貸すことにより、図書館にいなくても知識や情報を手に  
入れられるという、図書館の基本的な機能のサービスを楽しむことができる。しかも、地区館や分  
館があってシステムでつながっている。このような公共施設は他にない。図書館をわかりやすい例に  
たとえると、地区館・分館はまちのお医者さん、中央図書館は大学病院のようなものである。普段は、  
近くの小さい医者に行くが、大病となると大きな病院に行くのと同様に、図書館も一般的な利用であ  
れば地域館・分館に行くが、高度な情報が必要であれば大きな図書館に行くといった使い分けが可能  
である。

他の公共施設とは異なるという点を頭に入れて、本館の機能を考えていただきたい。地区館・分館  
で済む機能はそちらに任せて、本館は何をする必要があるだろうか。

先進事例についての講演とのことだが、日本を含め世界の図書館は大きく変わろうとしている。こ  
こ10年くらいが大きな変化の時期であり、とても難しい時期に図書館をどうするか、という問題に  
私たちは直面している。

本講演のテーマとしては「不易流行」を挙げたい。現在、「にぎわい創出」などを標榜する図書館  
などいろいろなものが生まれてきているが、それらがすべて生き残っていくとは考えがたい。「不易  
流行」、どんなに時代が変わっても変わらない本質的なもの、対して一時的な流行で廃れてしまうも  
の、図書館もこのような視点で考えていく必要がある。

私見ではあるが、図書館の本質は「情報を提供すること」である。本を貸すというのは目的ではな  
く単なる手段であり、情報を提供することが目的である。これは今後も変わらない。

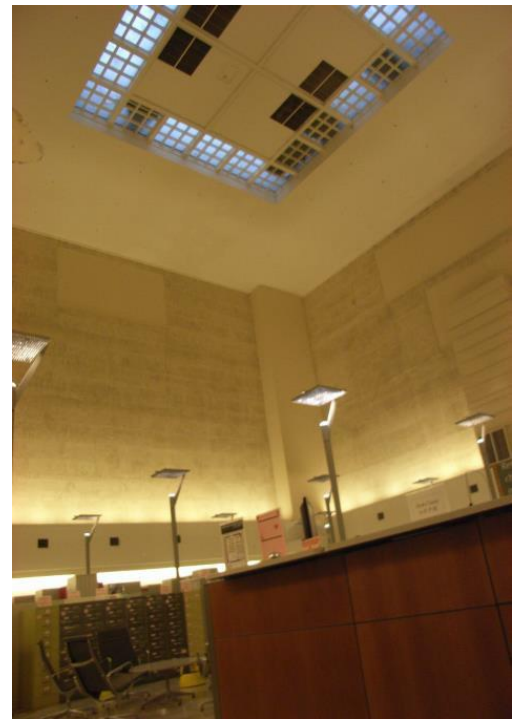
## ◆ 先進事例①「現代社会の変化に伴う図書館の変化（メディアの変化、サービスの変化）」

### ◇ 電子化

アリゾナ州立医学図書館では、以前は本が入っていた書架が撤去され、空間ができています。医学系の図書や雑誌はほとんどが電子化され、書架の使い道がなくなってしまったためである（【1】・【2】）。



【1】書架が撤去された図書館（アリゾナ州立医学図書館）



【2】書架が撤去された図書館（アリゾナ州立医学図書館）

では、本は全て消えていくのか。明らかに部分的には消えていく。

しかし、アメリカの図書館ではゆれ戻し（回帰）が起きていて、大きな図書館では改めて紙の資料を組織的に収集しなければいけない、という動きが出ている。なぜかという、政府が提供するような情報でもネット上のは消えていく、改変されていくというのが分かってきたからである。

また、CDやDVDといったメディアが使いえなくなってしまう、という現象も起きている。日本の国立国会図書館でも約半数が使用できない、再生できないとのことである。このため、紙が重要であると見直されてきている。

現代社会の変化が図書館の変化を促している。劇的に変化しているところもあれば、そうでないところもある。白か黒かのどちらかに全面的に入れ替わるのであれば単純な話であるが、実際は複雑に変化が進んでいる。米国の図書館ではデータベースや電子書籍といった電子化が進んでいる一方で、紙の貸出がまだまだ多いという状況である。日本の図書館は20～30年欧米から遅れをとっているため、これを見ると日本の図書館は20～30年はまだ紙が存在するであろうという予想がつく。電子か紙かという簡単な話ではない。

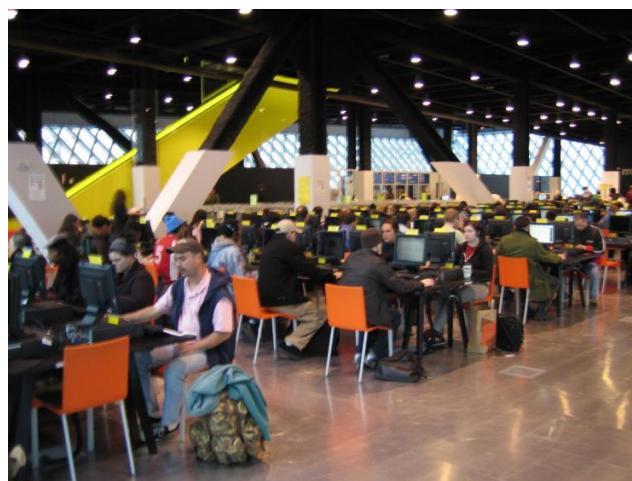
日本の図書館はなぜデータベースの導入が慎重か。アメリカでは本や雑誌、インターネットに加え、データベースが図書館で使えるようになっている。日本では、ネットとデータベースの区別ができない者が多い。日本ではあまり使っている人がおらず、この点は日本とアメリカの大きな違い、特に図書館現場での大きな違いである。データベースはその多くが有料であり、個人で利用する場合は支払いが必要であるが、米国の図書館の場合は図書館が使用料を払って、利用者は無料で使えるようになっている。また、図書館に行かないと使えないデータベースもあるが、多くは図書館の利用券の番号等をパスワードにして、自宅のPCでデータベースを無料で使える。

シアトル市立中央図書館で、データベース端末を多くの人が利用している様子である（【3】）。約300台の端末が設置されており、ほとんどの人が有料のデータベースを使用するため来館している（【4】）。残念ながら、日本にはこのような多数の端末が並んでいるような図書館はない。このようなものがこれから10年、20年先の日本の図書館には必要となってくるのではないか。書架を撤去して端末を置く必要が出てくるかもしれない。



【3】膨大なデータベース端末（シアトル市立中央図書館）

グーグルでなんでも検索できると思っている方がいるかもしれないが、仮にできるのであれば、有料のデータベース会社は倒産しているはずである。しかし、実在はしている。いつの時代でもただで手に入る情報は所詮ただの情報だということである。本当に必要な情報はお金を出さないと手に入らない。しかし、個人で支払うと非常にお金がかかる。このため、市民が税金という形で少しずつお金を出して、みんなで「情報を共有化」する。図書館で本を市民全員で使うのとまったく同じ仕組みである。高い本は買えないのでみんなで少しずつ税金を出し合って高い本を買い、図書館で共有することと同様である。



【4】膨大なデータベース端末（シアトル市立中央図書館）

データベースの利用が進んでいるアメリカの図書館でも、本の貸出が最大のサービスである。このことは重要である。

## ◇ レファレンス

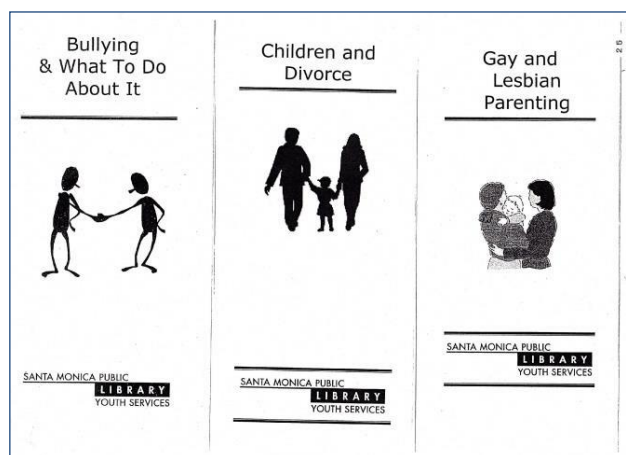
レファレンスは欧米では当たり前となっている図書館サービスであるが、日本では9割の人が知らないという調査もあり、図書館はただ本を借りるところだと思っている人が多い。

しかし、図書館の重要なサービスはレファレンスサービスである。レファレンスサービスとは、図書館に相談すると、図書館の職員が代わりに調べて回答してくれる、とても便利なサービスである。このサービスは専門性の高い職員がいないとできないが、多摩市には専門職集団が図書館の中にいる。これは最大の宝物である。他の自治体、特に地方には専門性の高い司書はいないところも多い。

多摩市の基本・実施設計業務委託に株式会社佐藤総合計画が選定された理由としては、このレファレンスサービスを積極的に行うための空間構成が行われている、というのがある。専門的な知識を持った職員が市民の方に声をかけられる、困っている人が職員を見つけて声をかけやすい。そのような空間構成にしよう、という点が評価されている。

サンタモニカ市立図書館で作成しているブックリストである（【5】）。

左側は **Bulling**、いじめについてのブックリストである。アメリカでもいじめは多く問題になっている。中央は **Children and Divorce**、子どもと離婚、アメリカでも離婚が問題になっており、子どもにどのような影響があるか、といったブックリストである。右側は **Gay and Lesbian Parenting**、カリフォルニア州では同性婚が当たり前であり、連れ子がいる場合がある。同性の夫婦がどのように子どもを育てるかという本についてのブックリストである。このようなものを図書館が作って市民に提供している。



【5】地域の課題を解決する（サンタモニカ市立図書館）

地域創生、地域をどうやって豊かで安全で住みやすい町にしていくか、そのために図書館があり、単に本を貸すところではなく、よりよく生きるため、自己実現するためにある、というのがアメリカ人の図書館のイメージである。図書館は本を貸すところ、と思った途端に思考停止に陥ってしまうが、アメリカの図書館はそうではない。市民がよりよく生きるのを支援するのが図書館であり、このために図書館は何でもやってよいと市民も思っている。

## ◆ 先進事例②「ラーニングコモンズ」

「第三の場」としての図書館、ラーニングコモンズについて紹介する。ラーニングコモンズは大学で多く取り入れられている。大学のラーニングコモンズは、学生が自由に集って議論ができる場である。これはアクティブラーニングとリンクしており、授業の前に勉強して、授業に臨む、ということをして学生が行っている。昔の大学図書館は静かだったが、今はそうではなく、賑わいのある場である。

学生もグループによってイスや机に対してのニーズが異なってくるため、イスや机は色々な形が設置されている。ガラス張りで独立した部屋となっており、音が漏れないようになっている（【6】）。

開放スペースでイスや机を使って自由に議論する場もある（【7】）。学生に一番人気はファミレスタイプである（【8】）。日本でもアメリカでもラーニングcommonsの空間で一番人気があるのがこのファミレス型である。

電子機器が全て用意されており、それぞれスマホやパソコンを持ち寄って、壁に投影して議論する。また、壁はホワイトボードになっており、思いついたことを壁に書くことができる。



【6】ラーニングcommons（同志社大学）

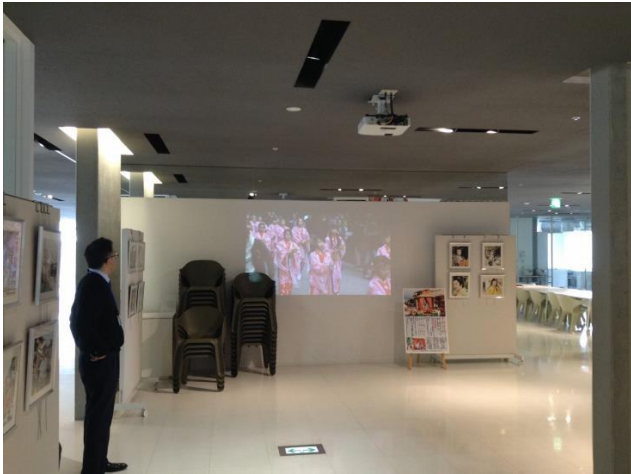


【7】ラーニングcommons（同志社大学）



【8】ラーニングcommons（同志社大学）

ラーニングcommonsを公共図書館でもやらなければならない、ということでアメリカでは広まっている。日本型のラーニングcommonsの例として、長野県の塩尻市立中央図書館を挙げる。【8】と同様に壁に投影する機械が設置されており、自由にイスや机を並べて座れるようになっている（【9】）。老若男女いろいろなグループが来館し、一年中わいわいやっている。ここは廊下のような、ホールのような公共空間でゆったり活動できる場が用意されている。自習をしている人（【10】）、グループで議論している人もいる（【11】）。ボランティアの方が定期的集まり、イスや机を並べて、資料を準備して作業しているところである（【12】）。子どもスペースのところでも色々なグループが集まっている（【13】）。



【 9 】 ラーニングコモンズ（塩尻市立中央図書館）



【 1 0 】 ラーニングコモンズ（塩尻市立中央図書館）



【 1 1 】 ラーニングコモンズ（塩尻市立中央図書館）



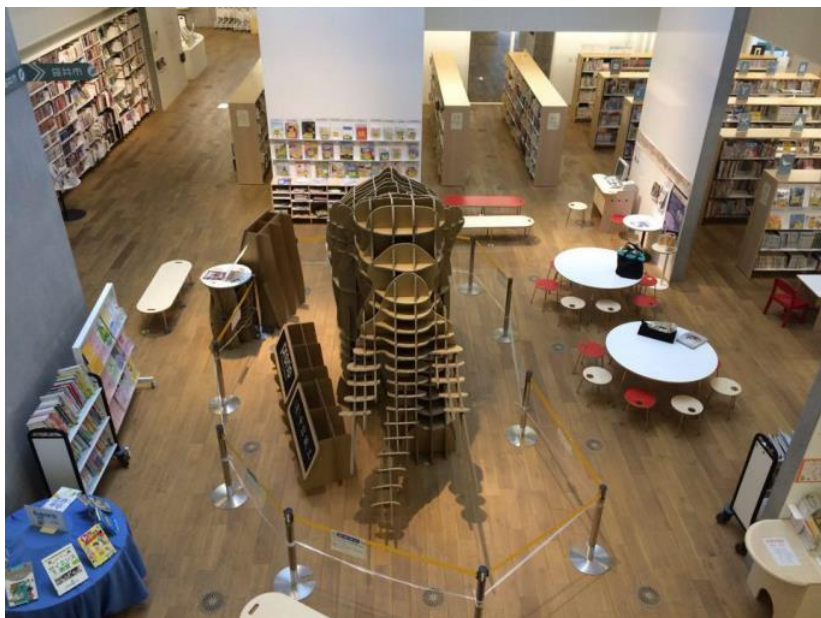
【 1 2 】 ラーニングコモンズ（塩尻市立中央図書館）



【 1 3 】 ラーニングコモンズ（塩尻市立中央図書館）

このように色々な世代の人が集う施設は日本にもあるが、狭すぎる場合が多い。狭いと、高校生がいたら小学生、中学生は入って来ない。大人がいたら、小中高生は入って来られない。かなりの余裕がないと多世代が交流することは無理である。今回の佐藤総合計画の設計は余裕を持った空間を設計しており、本棚の間を縫って、このような空間を実現させようとしている。このため、新本館は静かにする図書館ではない。

地方には塩尻の図書館のような多世代が集える空間が実はない。開館して以来、市内だけではなく周辺の自治体からも人が来館し、それらの人が市内にお金を落としていることもあり、大成功している事例である。長野県内で一番利用率が高い図書館となっている。自由な空間があるので、このようなこともできる。これはダンボールで作った巨大なマンモスである。このようなものを置く展示も行っている（【14】）。広い空間の中に独立したガラス張りの部屋もある。隠したいときにはレースのカーテンを引くこともできる（【15】・【16】）。今回の佐藤総合計画の設計にもこのような部屋がある。



【14】ラーニングcommons（塩尻市立中央図書館）



【15】ラーニングcommons（塩尻市立中央図書館）



【16】ラーニングcommons（塩尻市立中央図書館）

佐藤総合計画が建築した高知オーテピアは、県立と市立図書館の合築という日本で初めての例である。ここにもガラス張りの部屋があり、大きな声を出しても音が漏れないようになっている（【17】）。さらに、わいわいやってもいい空間に対し、静かにしたいという人もいる。高知の場合は一般的な空間はわいわいできる場所で、静かな空間を分離している。静寂読書室はガラス張りで防音されているので、中が静かになっている（【18】）。



【17】高知オーテピア



【18】高知オーテピア

アメリカの大学図書館も同様で、ほとんどの場所で話ができるが、ワンフロアだけ静かにしようと言うような発想が出てきている。昔は、図書館は全体が静かにするところであったが、逆転している。ほとんどの場所がにぎやかで良い。このため、小さい子どもを連れてお母さんも遠慮なく図書館を利用できる。その代わりに静かな空間が必要な人には静かな空間を用意するという、完全に逆転の発想になっている。

#### ◆ 先進事例③「メーカースペース」

デトロイトの図書館は、本棚を取り払って作業場のようなものを作り、この中には、3Dプリンターやカットマシンが設置された（【19】）。日本で言うファブリケーションラボ（ファブラボ）のようなものがアメリカの図書館では取り入れられていて、公共図書館の70%以上はこのような施設を作っている。

デトロイトは既存の空間を利用して作られたものであるが、最近の図書館では、予めこのような部屋を作っている。シカゴ市立中央図書館の maker space では先ほどのラーニングcommonsと同様に壁全体がホワイトボードとなっており、議論しながら、思いついたことを書き込み、持ち込んだパソコンのデータを表示することができる（【20】）。パソコンを使って素人が制御できるような優れたアプリケーションがたくさん出てきていることもあり、ここでは世代や人種を超えてみなで何かを作っている。

市民が自己実現する、市民が豊かに暮らしていく、そのためであれば図書館は何でもやる、というのがアメリカである。いまやものづくり大国に戻ろうとしている。生産拠点を国内に引き戻す等の大きな流れの中で、図書館も変わりつつある。また、失業者が就職するためにメーカースペースで新しい技術を手に入れようとしている。失業者を支援するボランティアグループもあって、図書館はこの



ようなボランティアの人々の支援の場にもなっている (【21】)。



Top and bottom right photos by Kevin Henegar; Bottom left photo courtesy of Detroit Public Library

【19】Maker Space (デトロイト市立中央図書館)



【20】Maker Space (シカゴ市立中央図書館)



【21】Maker Space (シカゴ市立中央図書館)

#### ◆ 先進事例④「図書館の機械化・AI化」

貸出・返却の自動化、予約資料の自動貸し出し、ロボットの導入、AIの利用(簡単なレファレンスはAIでやる)等がある。

安城市立図書館では、予約した本を24時間受け取ることができる(【22】)。

サンフランシスコ市立図書館の自動貸出返却機である。この機械の裏では返却された本を機械が分類している(【23】【24】)。機械によって分類された本を人が配架している。規模の大きい図書館

では当たり前のように導入されている。今回の設計では、このようなことを将来実現ができる空間を用意している。

実証実験の例として、つくばの市立図書館では、資料の運搬は重労働であるためロボットを導入している（【25】）。また、先端技術センターの配架をするロボットもある（【26】）。配架は手間のかかる大変な労働であり、この作業のために人が雇われたりするが、ロボットで夜間等に整理をするといった取組が始まっている。



【22】 予約資料の24時間貸出（安城市立中央図書館）



【23】 資料返却の自動化  
（サンフランシスコ市立中央図書館）



【24】 資料返却の自動化  
（サンフランシスコ市立中央図書館）



【25】ロボット導入（つくば市立中央図書館）



【26】ロボット導入（先端技術研究センターでの実証実験）

#### ◆ おわりに

図書館の本質的な機能は情報の提供であり、本を貸すというのではない。次に、環境の提供である。ただ、あくまでも情報の提供が最優先で、それを支援するような形で環境がある。このようなことで市民の自己実現を支援する、というのが図書館である。ご清聴ありがとうございました。

※ 写真・図は全て常世田先生提供